

編集委員が 行く

2年がかりで在宅業務を開拓 居住・就労環境整備も重要

— 有限会社「ヤクシ」を訪ねて

本誌編集委員 国際医療福祉大学 福岡保健医療学部教授 齊場三十四

●特集●在宅就労



取材先データ

有限会社ヤクシ

〒707-0022 岡山県美作市榎原上69-8
TEL 0868-72-6225 FAX 0868-72-2108

NPO法人美作自立支援センター

(就労継続支援A型事業所)

スタート・ワーキング・サポート

〒707-0024 岡山県美作市榎原下904-14
TEL 0868-72-2115 FAX 0868-72-2108

- 代表：代表理事 薬師浩司(有限会社ヤクシ代表取締役兼職)
- 設立：2009年12月
- 業務内容：繊維加工(糸巻き)、金属部品検査(ねじ穴検査)、トマトのハウス栽培

(写真) 小山博孝

編集委員から

今回、岡山県北部に、障害者の新しい可能性を求めるあゆみの一歩があった。取材のなかで、基本的な生活、作業環境を整備し、心身への負担を減らす視点が必要であり、障害者側も作業姿勢などに点検工夫が必要である。災害時支援も含め、この点への行政や周辺関係者の支援を確立することも急務であろう。



Keyword：製造業、農・林・漁業、知的障害、身体障害、精神障害、在宅就労、就労継続支援A型事業所、職業リハビリテーション

POINT

- ① 在宅就労可能職種を創り出す
- ② 可能性を信じて挑戦する
- ③ 在宅就労環境を整備する

障害者は就職困難な時代だった

8月19日。暑い！新鳥栖駅から新幹線で岡山駅に向かう。熱射病対策にお茶とコーヒートを車内販売で購入。2時間ほどで到着予定だ。

コーヒー片手に、私は少々もの思いにふけた。50年近く前、障害者の進学・就職は困難な時代だった。幸いにして日本福祉大学（愛知県）に学ぶことはできたが、就職は心配だった。4年生の夏休みを前にしたとき、教授から「九大（九州大学）病院に実習に行ってください」といわれ、いまはなき熊本行の急行「阿蘇」に乗り込んだのが、私の就職への一歩となった。

実習終了間際に、九大病院心療内科の池見西次郎先生（*1）から、「齊場君、九州労災病院の原武郎君（*2）を訪ねなさい。リハビリテーションという新しい医学を学んできているから、きつと勉強になるよ」と送り出された。

突然の訪問見学だったが、九州労災病院のリハビリテーション病棟などを見せていただいた。原先生の「医療の責任において、社会復帰まで責任を持つ」といった取組みに、新鮮な驚きすら感じた。見学をすませ部長室で、米国での取組みなどを聞くことになった。「障害者の社

会復帰を当然のことにしなければ」と強く感じた。

そろそろ帰ろうとしたとき、原先生から、「齊場君は、就職は決まってるの。まだだったら、九労（九州労災病院）にきませんか」といとも簡単に聞かれた。しかし、いまとは異なり、名古屋から小倉へは、国鉄在来線の急行で20時間余りかかる時代。あまりにも遠い。「考えさせてください」と答えるのが精一杯だった。

その後、就職はできないかと、いくつかの病院にアプローチした。しかし、思うような就職先は見つからず、原先生の言葉に思い切つて飛び込み、自分の夢を託すことにした。

リハビリテーションは総力戦

九州労災病院に就職間もないころ、外来に来るように呼ばれた。「齊場君。患者のAさんだが、障害は少々重いけど復職させましょう」ときた。そのAさんは製鉄会社で圧延機に巻き込まれ、右上腕・右大腿・左下腿、そして左手指部の切断という重い障害を持つ状況での入院だった。

「齊場君。理学・作業療法、そして義肢科が頑張るので、その努力を無駄にしないように復職させてください。ソーシ

ヤルワーカーの取組みがとて大切になります」、「社会復帰・就労させることができなければ、リハビリテーションが成功したとはいえないのです」と教えられた。

どんなに重症重度であっても、「あきらめない」リハビリテーションの思想によって、身の回り自立度アップ、立つて歩かせ、仕事をさせようと、チームの総力戦が始まった。

私は、ソーシヤルワーカーとしては新人である。まだ何もわからないなかで、職場訪問を実施。おそろおそろ復職の意向を伝えてみた。幸いにして、彼の勤めていた会社の快い返事に触れることができ、全面的な協力が得られた。配置転換のうえ、復職就労のゴールを実現することができた。

このAさんとの出会いで、障害者の可能性を信じるのが、自分のなかに注入されたのかも知れない。

「とことん可能性を引き出す。足りない・失ったものがあれば、つくればよい」というのが原先生の基本思想であり、「可能性を信じる。あきらめてはいけない。常にゴールは、世間常識に振り回されず、少し欲張り、高めに設定する。そして、しっかりと背中を押すことが大切だ」と教えられた。

その後も、会社や家族の協力でAさんの就労生活は継続された。今日的にいえ

(*1) 池見西次郎：九州大学病院の医学部教授、心療内科・心身医学の創設に尽力、心で起こる身体の病など、診療時の患者との接点など新しい分野として確立。

(*2) 原武郎：九州労災病院のリハビリテーション科医で、米国ラスク医師に学び、九州リハビリテーション大学校の設立など、近代的リハビリテーションを日本に取り込んだ一人として大きな影響を与えた。



有限会社ヤクシ

ヤクシの障害者との かかわり

ば、「早期退院・在宅ケア」という通常ゴールを急ぐだけでは、Aさんの「ゴールは復職」とする方向での対応は想定外とされるのではないだろうか。

岡山駅で、本誌カメラマンの小山さんの車の助手席に乗り込んだ。今回は、岡山県北部で就労継続支援A型事業所を運営する「有限会社ヤクシ」の薬師浩司社長を訪ねる。

この会社は、現社長の薬師さんの父親である薬師明治さんによって、1985（昭和60）年に設立された繊維加工の会社だ。会社設立前は、家内工業的だった時代の1983年、近くの会社で解雇された2人の知的障害者に、「住まいと仕事を」と職業安定所（ハローワーク）の担当者から依頼された。「面倒みてもいいよ」と4年間にわたって自宅に住ませ、生活と仕事を共にしたという。

寮ができるまでは当然、薬師社長は彼らと共同生活だった。その後、自動車部品分野にも進出、障害者雇用を積極的に推進してきた。そして、薬師社長は会社を引き継いだ。

薬師社長の第一印象は、頑強さより、どちらかといえば控え目で、前社長の影響なのか、優しさがあふれる感じだ。し



繊維加工部門



金属部品検査部門

かし、その後の歩みを聞いてみると、そこには優しさに裏付けられた強い信念によって、熱い思いで実践行動するという強さ、そして頑強さに出会うことになった。

2009（平成21）年には、障害者雇用数の増加、生活環境の充実のために、NPO法人美作自立支援センター「スタート・ワーキング・サポート」（就労継続支援A型事業所）を立ち上げ、現在、知的障害者を中心に33人（知的障害22人、身体障害8人、精神障害3人）が働く、県北部の基幹的機能を持つ事業所に発展してきたのである。冬は積雪もあるこの岡山の北部に、障害者の未来を切り開く拠点が「うごめき」、そして挑戦している事業所といえそうだ。

いつ成長するかわからない

薬師社長は常に障害者に、「思いきり特長ある職人になろう」と呼びかけると



薬師浩司代表取締役

いう。「スタート・ワーキング・サポート」は、仕事に慣れるまで本人の希望に合わせ勤務スタイルを構成する。先輩の障害者と職業指導員との協力で、時間をかけて組み立てる。

薬師社長からは、「障害のある方たちは、いつ伸びるかわからない。ある時期がくると、びっくりするほど急成長したりします。その人その人に合わせた流れを見つけることが大切で、焦らず各個人の成長を見守ることが基本なんです」と、「可能性を信じる」立場を、控えめながら話していただいた。

在宅で地図作成。自宅環境は…

2年ほど前、薬師社長は障害者から、「在宅で就労をしたい」と聞いかけられた。通常なら、事業所でやっている業種を考えて、「適合するものがありません」

で終わってもおかしくはない。しかし私は、薬師社長の話を聞くうちに、「お父さんの血が引き継がれている」といったくなった。社長の心のなかに、「この障害者の願いをなんとか実現させよう」と、優しさがうごめいたのだ。

社長はその後、2年間にわたって、在宅就労可能職種を探した。そして、土木事業などのときに必要とされる「地図づくり」の仕事を探し出し、在宅就労の願



勝山美紗子在宅就労職業指導員

いを実現することになったという。薬師社長は、「この分野は、国防上から国内処理が求められる、需要度は高いので、拡大していく可能性がある」と話す。

介護の仕事をしていた経験を持つ、在宅就労職業指導員の勝山美紗子さんを担当に準備期間中から専任化し、2年にわたって準備を進めた結果、今年の7月からパソコンでの地図づくりを、在宅就労の形で新事業としてスタートすることになったのだ。

勝山さんは、在宅就労者とメールで頻繁にやりとりし、事業所への所属感を失わせないようにしたり、相談にのったり、指示を出したりしているという。在宅就労によって、就労不可能だと考えられてきた重い障害群の就労の可能性は高まることになる。スタートしたばかりだが、薬師社長と勝山さんと一緒に、在宅就労している2人を訪ねてみることにした。

1人目は、胸髄損傷による両下肢まひ（障害者手帳1級）で車いすを使う吉田



自宅で、地図作成作業を行う吉田安江さん（35歳）

安江さん。チャームिंगな笑顔、明るさと強い就労意欲を感じた。美作地区は農林業を主とする地域で、住環境は立派な農家づくりが多く、彼女の家もまさにそのもの。まひレベルは高いので、作業姿勢は畳の上で片膝を立てて身体を支え、座位姿勢でパソコンに向かっておられた。

まだ居室などは、車いす用に整備されていないのか、1階の畳部屋にベッドと車いすを持ち込んでの生活だ。勝山さんとのやりとりをみると、相互信頼度は高そうだ。新しい仕事である地図作成

作業に、熱心に取り組んでいた。

2人目は、変容性骨異形成による両上肢機能の著しい障害（障害者手帳2級）で、傷病的には四肢の腫れがみられ、車いすも使う生活をされている河本良太さんである。住環境は農家づくりであった。階段での昇降を伴う2階に居室・作業室がある。障害のある手と腕で、器用にパソコンへの打込み作業をこなされている。作業姿勢はテーブル、車いすの作業スタイルであった。

地図策定の仕事が確保され、生活リズム、すばらしい作業実績を生み出し、この分野のパイオニアになる可能性を感じるとともに、私は久しぶりに不思議な感覚に襲われた。

しかし、やはり気になったのが、階段の昇降を伴う生活である。慣れているだけに、彼なりの方法で1日数度の階段昇降は行っているとはいえ、心配だ。私も昇りは「四つんばい」、下りは「お尻着けスタイル」で昇降したが、この環境での生活は在宅就労以前の問題として、なるべく改善しておかねばと思う。それは、原学校卒業生として、安全の確保の点からも解決すべき課題の一つだからである。

在宅就労の基盤づくり

私は40数年前、頸髄損傷で四肢まひの



吉田さんの仕事を見学する齊場本誌編集委員

障害者に、当時300万円のワープロを導入して、会社からくる手書き原稿の清書を仕事として在宅就労させた。しかし住所が東京都区内であり、住環境の入手と整備に非常に苦しんだ経験がある。

その一方、以前担当したカナダやドイツの関係事例では、必要な福祉用具の給付は当然で、一戸建て住宅すら保険によって提供されていたことを思い出す。日本でも住環境整備は、リハビリテーションが盛んになるにつれ拡大傾向ではあったが、現実的には充実困難部分として、足踏みしている状況かも知れない。

今回、訪問した2人には、久しぶりに



河本さん宅を訪れ、支援にあたる勝山指導員



自宅2階の自室で仕事をする河本良太さん（27歳）

不思議な感覚に襲われるほど、在宅就労意欲を強く感じた。今後も在宅就労のバイオニアとしての活動が必然的に期待されるだけに、生活・就労環境を整備拡充することは緊急な課題だろう。

火災、地震、大雨など災害時の対応も急がねばならない。いざというときの人手は、在宅では極端に少なくなるが多量に、事業者側も検討しておきたいものだ。薬師社長にも、在宅従業員の生活環境整備に目を向けていただくことをお願いした。

彼らの可能性を信じればこそ、未整備

のままでは身体機能への負担が大きく、痛みや変形を招くことになったり事故につながることは、どうしても防がねばならない。障害者も、生活環境整備の大切さを知らなかったり、住環境整備には資金がかかるといういい出せない場合とか、慣れで解決してしまっている場合も多い。行政や周辺関係者の支援をどう構築し、在宅生活環境整備をどう届けるかは、今後、職業指導員の大きな課題でもあろう。

在宅就労の成功は、事業所への所属感、スキルアップも含め、障害者の意欲、行動力を高める環境提供について関心を持つことが不可欠だ。在宅就労を意義あるものに展開できるかについて、この分野の関係者すべてが、強く認識しなければならぬだろう。

再認識した可能性の大切さ

在宅で就労することで障害が重くなったり、「人と会わないで気が楽」、「自宅なのでわがままがきく」などと、社会参加を不得意とする障害者を生み出した。そのため、一般就労が可能であるにもかかわらず、安直に在宅指向が高まることであってはなるまい。

障害者医療・リハビリテーションの充実とともに、職業領域の指導員が連携することがないままでは、今回の取材であ



この日は給料日。薬師社長から明細を受け取る河本さん

きらかになった「可能性を信ずること」を実現はできないだろう。最近のアセスメントは、「可能性を否定する」減点方式が主流である。

かつて原先生からは、「常識に振り回されず、少し欲張り、高めに求めることが必要」だと教えられた。その大切さを再確認すると同時に、薬師社長や2人の在宅就労挑戦者から教えてもらったことになった。大きな宿題をもらった気がして仕方がない。自分に何ができるかを考えていたときに、「次は新鳥栖」とアナウンスが聞こえ、蒸し暑いホームに降り立った。